〈第Ⅱ会場〉（三〇二一教室）

「乾（カン）」「乾（ケン）」字考

文学研究科中国学専攻博士後期課程二年　藤田　拓海

「乾」字は、「常用漢字表」に、音として「カン」が、訓として「かわ-く・かわ-かす」が示されており、「乾燥」という熟語はこれに相当する。一方「乾坤」という熟語は「ケンコン」と読むため、「乾」には「カン」「ケン」二つの読みがあることになる。

この二つの読みは、意味の違いに基づくもので、中国においても同様である。すなわち「かわく」の意味には「カン」「gān」を用い、「天、易の卦、いぬい」の意味には「ケン」「qián」を用いる（ただし、現代中国では「gān」に「干」を用いる）。

以上は、近現代の辞書類による説明であるが、これは宋代以降の小学書（字書類）に基づくものである。

しかるに、唐代の事情はこれとは異なる。敦煌本を中心とした写本類には「カン」にたいしては「乾」を用いるが、「ケン」にたいしては「乾」を用いているのである。すなわち「乾」は近現代の辞書類では「乾」の異体字（俗字）とされているが、唐代においては形・音・義の異なる別字として機能している。

本発表では、『切韻』『玉篇』『干禄字書』『九経字様』などの小学書や写本をもとに、唐代に存した漢字用法の一端を明らかにする。

虹と平安文学
――作品に登場の鮮少な「虹」の謎――

文学部国文学科三年　田中　幸輝

「虹」という自然現象は、古来より記録に散見する。しかし、文学作品においては、「虹」の登場例は意外と少ない。記録の初出は、六国史『日本書紀』より散見されるものであり、『古事記』にも記載が見られる。また、その後も断続的に記録が確認されるものであるが、文学においては、その登場は極めて稀と言わざるを得なく、特に平安文学においては、『竹取物語』『伊勢物語』といった『源氏物語』以前の物語群並びに『土佐日記』、『蜻蛉日記』といった日記文学群に登場しない。さらに韻文学に視点を移してみても、平安期に編まれた『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集に用例は見当たらない。私家集や漢詩集に僅かに記される程度である。

そこで本発表では、平安時代において、気象現象としての「虹」が、当時の文学にどのような用途をもって現れ、機能してきたのかを明確にする。その方法として、平安期における文学作品内での「虹」の用途・受容を、古記録類や文学作品内の「虹」の解釈の共通点から考察・検討する。その過程の中で古代文学における「虹」の登場が、何故これほどまでに少なかったのか、その理由を模索する。